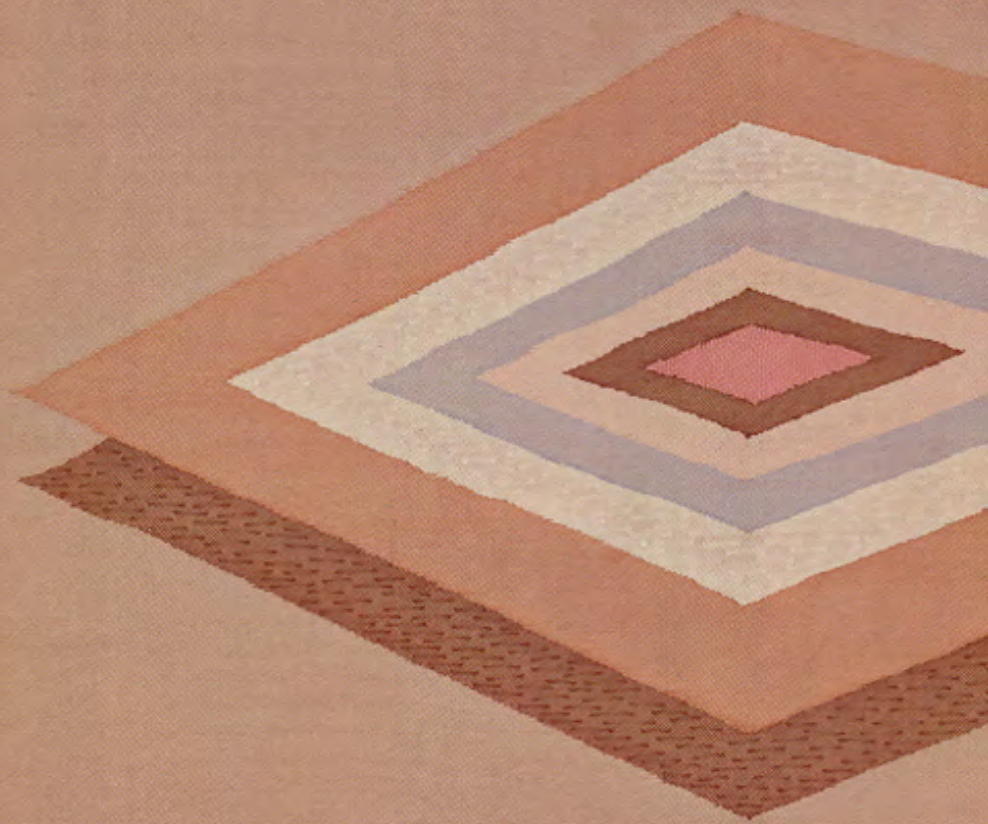


京鹿子

平成二十五年二月一日発行
誌者一〇六二年(毎月一回)田中(社)



2月号

豊 田 都 峰

渥 響 集 その四十二

山 の 日 の 雑 木 も み ぢ の 月 日 かな

黄 落 や 千 手 の 願 ひ 欠 け る な し

黄 落 や 仏 半 眼 と く こ と な し

日 当 れ る 雪 嶺 ひ と つ カ ム イ の 座

月 光 の 雪 嶺 尖 り ゐ て 神 座

雪 や ん で 星 は 神 話 を 組 み は じ む



外灯の見守る枯れのひと幕目
すすき枯れゆくほどに山遠ざかる
借景は海にす庭の敷松葉
北風に手を出すものの怒髪なる
北風を脱ぎつつ宴の座を得たり
朝もやににじみ抜け出る冬櫂
冬芽はや神丘の日をひとり占む
白日を絡めとりゐる枯櫂

—丸山佳子作品—

冬園

丸山佳子



冬園にたぢ縞馬はあかるき瞳
短日の鸚鵡に佇てば馬鹿といふ
鹿かけてゆく凍園に風の渦
寒水にしづみて河馬の力みつ
寒の水吹きつけ象の発情す

秀華採集

百も承知二百も合点木の実晴

鷺山 珀眉

木の実の豊かさを、うまく語呂合わせをし、「承知・合点」の採用も洒落た繰り返しになっており、たいへんあざやかに表現している。自家薬籠中の物めいてきている。

たし算へ貸す婆の指小望月

村 上 千 紫

寒さやや街の裏まで観てしまふ

金 子 野 生

前句の「小望月」、すなわち十四は両手でたりないという設定がよく、それを助けるのが婆、また楽しい。後句、寒さの屈みが伺われるが「裏まで観」という細かさがそれを助けている。



—近詠—

鈴鹿
仁

松の心音

お降りの松の心音あをあと
白雲を恵方へ流し夜明月
きざはしの神への念ひ冬木の芽
鴉にもからすの信条冬の杜
句碑を守る風のやさしき冬うらら



— 近 詠 —

島 柱

和田 照海

北風激しにはかに湧きし鳥柱
灘日和渡船に秋の蠅叩き
医者舟に灘の真中のしぐれ虹
時化日和一湾を出ぬ冬鷗
冬の日矢渡船が連れて島へ着く



ハロウイン 北村 香朗
 どの飾りどれも欲しいよハロウイン
 ハロウイン和光も歩行者天国に
 大小め飾りわれこそハロウイン
 風の捲く押さるるままの片ドア
 新刊の香りに押さる小春かな

大根焚 藤岡 紫水

子らは竹父は縄持ち冬囲い
 切株に木の香の匂ふ冬日向
 灯は一つ影は四方に冬座敷
 煮えたぎる日本の味大根焚
 畦に沿ひ急ぐ近道冬菜畑

春や春 竹貫 示虹

掃除器の追儼の豆を吸ひし音
 立春の日ざしの刻む田畳の目
 窓ガラス拭きつつ唇に早春賦
 雪割草耐へしものほど遅しき
 春や春笑ひころげる女子高生

松田 都青
 妻と子が振り向く距離にゐて小春
 秋愁の終着駅は胃のあたり
 空間と時間が曲る 鯛雲
 秋去るや誰も知らない明日が来る
 山腹で呼吸してゐる富士新雪

冬あたたか 北川 孝子

欠点も個性も生きて冬あたたか
 聞き流す事のまた増え雪催ひ
 省略の始まりいよよ山に雪
 雪もよひ日進月歩といふ不安
 雪ぼたるふと蒼天の使者かとも

狐 火 柴田 朱美

狐火に半身喰われてしまいいけり
 狐火や納屋への道は昏すぎる
 私小説を書く狐火を引き寄せて
 狐火に触れて火傷の指ほてる
 狐火や終生日蔭でありにけり



芒(前月号) 柴田朱美
芒長け山家暮しの昼下り
芒原こんど曲れば海消ゆる
あるやうでない一線や芒原
花 芒母音の甘き国訛り
風の芒ゆれてゐるものみな不安

枯れ野 丸井巴水
崩落のままに早くも山眠る
天敵の目も衰へて枯野原
大根干す間近でシヤツタ音頻り
素つぴんの五百羅漢へ照紅葉
老い型の島の首まで冬が来て

冬霞二川は光りあひて合ふ
幸せはこころが決める枯蓮
白き船の行方見てゐる枯木山
聖樹燦ピアフの唄と湖のこゑ
ポインセチア強さが決める女らしさ
塩貝 朱千





京鹿子集

豊田都峰選

百も承知二百も合点木の実晴

平静を装うてゐる秋袷

面影はあの日のままに露しぐれ

黄葉紅葉あなたの青も忘れない

たし算へ貸す婆の指小望月

どん栗を拾ひ遠き日拾ひけり

野菊晴線路寄りては又離れ

旧道は雲助道とも野菊咲く

寒さやや街の裏まで観てしまふ

砲台場名のみそのままに涼新た

城陽 鷺山 珀眉

豊中 村上 千紫

青梅 金子 野生

秋澄めり鷗の声の蒼むほど

鱗雲三羽鳥の向き向きに

鮮麗な黄葉の林立空かくれ

徐行して雑木紅葉を右ひだり

遠き日の子犬のワルツシヨパンの忌

夕日映え黄葉の煌めき別れ告げ

晴れ姿おてんばどこへ七五三

あれこれと文化伝へる京の秋

短日やカフエで過ごす良き時間

笑顔よし身のそぶりよし嬰の秋

オハイオ 水谷 直子

ロサンゼルス 丸田 信宏